

津幡の空から

石川県学校生活協同組合

2019・6月号

創立70周年の石川県学校生活協同組合

70周年記念行事は、ボウリングとサッカーと観劇！

1949年に石川県学校生活協同組合は創設されました。人であれば70年は「古希」でめでたい喜びの年です。企業として考えるとなおのこと、70年間と言う営みはよくぞ続いたなと思います。これまでの経営陣の皆さんに感謝を申し上げます。

そして、経営状況が万全であれば、70周年記念セレモニーでも開催しようかなとなるのですが、残念ながら、今はそのような余裕はありません。しかし、この状況で、できる最善の記念行事を考えました。それが、上記のものです。ボウリング大会は加賀地区で、サッカー観戦は金沢地区で、観劇は能登地区で開催の予定です。これらの行事をメインとして、いろいろな事業を「70周年記念事業」として順次計画していきます。

「組合員とともに70年、これからも、この先も」を合言葉に、組合員に愛され続ける石川県学校生協にしていきたいと考えています。



2019年4月末決算 221万円の赤字。計画よりは136万円の改善！

石川県学校生協の2019年度4月末決算は、経常剰余▲221万円ですが、計画目標は357万円の赤字ですから136万円の改善となります。その状況を詳しく見てみますと、計画比で供給高は103%、供給剰余が125%、受取手数料が148%、保険料控除手数料が102%、事業総剰余が122%、と計画に比べ順調に伸びました。そして、事業経費は93%とダブルの好結果でした。うれしい限りです。しかし、それでも赤字経営です。でも、この調子で、計画を越えて行ければ、今年度末には25万円の黒字を達成できます。油断しないで、着実に乗り越えていきたいと思っています。職員一同、笑顔を忘れずに頑張っています。まずは、ありがとうございました。

石川県学校生活協同組合は、県内の教職員を対象とした職域生協です。学校という職場の中で教職員の生活を共同で守り向上させることを目的に結集した福利厚生組織であり、石川県の教職員の自主福祉活動や消費者運動の拠点になっています。

シリーズ 第9回 《岩産の聖母》 北本 豊春

レオナルド・ダ・ヴィンチが描いた、「岩窟の聖母」と呼ばれる作品は、論議の対象となった問題作の一つです。ダ・ヴィンチの「岩窟の聖母」二点あって、一点はパリのルーブル美術館、もう一点は、ロンドンのナショナルギャラリーに展示されています。最初に描かれたのは、ルーブル美術館にある作品です。この絵画では、聖母マリアの横に幼児が描かれ、下方に位置する幼児は向かって両手を合わせています。下方にいる幼児は懐いているように見え、すぐ横には女性が描かれています。この絵からは、誰がキリストか誰がヨハネか良く分かりません。聖母のすぐ横にいて高い位置にいる幼児がキリストで、下方にいる幼児がヨハネだと考えられますが、はっきりとしません。ヨハネの横にいる女性は、マグダラのマリアだとも考えられますが、明確ではありません。注文主は、受け取りを拒否しますが、明確ではありません。注目の絵を描く意欲を失ってしましますが、弟子たちの説得で何とか二枚目の絵の構図を描きます。彩色は弟子たちによると言われています。二枚目の絵では、聖母のすぐ横の幼児が杖を持っています。この幼児がヨハネであることが分かります。すぐ横の女性には羽が描かれています。天使ガブリエルだと言うことになりました。パリの市民はルーブルにある作品を支持し、ロンドンの市民はロンドンナショナルギャラリーにある方を支持します。どちらも素晴らしい作品ですから、甲乙はつけられません。

編集後記

亀は、なぜウサギを無視したのか？

私は、今、「僕らは奇跡でできている」というドラマにはまり、何度も見返しています。その中にあった問題です。みなさんはどう考えますか？普通に道徳的に言うと、ウサギは勝ったと思って油断をして、亀は油断をしないでコツコツと努力をしたから勝った、だから、亀の様に努力をしましょうとなります。しかし、ドラマでは、亀はただ歩くだけで、その視野の中にウサギは入っていなかったから起こさなかったという回答をしています。そして、ウサギを上昇志向のもの、亀を勝つとか負けるとかには興味がなく、ただ歩く好奇心のかたまりとしています。私は、同じ事象でもいろいろな考え方があるし、一つの回答にこだわらない方がもっと面白い解釈ができるのだなあと思いました。

(ほその)